京都歴史災害研究　第21号（2020）23～29

短　報

近世大阪の火除土手と火除信仰施設について

木谷　幹一*

Ⅰ．はじめに

近世大坂における防火政策のうち、建築規制では土蔵が奨励されていただけで、火災時の延焼予防のための空地、つまり火除明地の設定は江戸と比べると貧弱であった[1)]。

大阪における火除明地の歴史を概観すると、まず寛文4（1664）年8月の触れで天神橋をはじめとする公儀橋詰が火除明地として設定された。以降、享保9（1724）年3月の大火、通称妙知焼けによって、大坂城北側に位置する都島区片町や中央区大手前1丁目と、大阪城西側の大坂西町奉行所があった中央区本町橋周辺が火除明地として設定された。宝暦9（1757）年には、先の妙知焼けの火元に近い西区南堀江4丁目の木津川右岸沿いが火除明地として設定されている[1)]。さらに安永6（1777）年12月の大火では、北区天満橋1丁目の川崎東照宮が被害を受けたため、安永7（1778）年の川崎東照宮の再建に伴い、川崎東照宮の南側にあった磯矢と萩野の与力屋敷が御宮火除用地となった[2)]。

筆者は、2018年に大阪造幣局構内の洪水標示石について調査を行った[3)]。そこで、桜クラブと北2号館の間に石を貼り付けた土塁があり、その上に弁財天社が祀られていたことに気がついた（写真1）。これは、天保8（1837）年の大塩平八郎の乱によって川崎東照宮が焼けた後、乱の首謀者である大塩やその親戚の西田の役宅などが接収され、火除明地として設定されたところであり[4)]、川崎東照宮の防火のために火除土手が設けられた場所であった。その後、弁財天社部分の火除土手は、造幣局により昭和15（1940）年9月ごろにさらに盛土され、弁財天社が祀られていたのであった[5)]。

火除土手は、岡山大学の馬場俊介名誉教授を管理者とするホームページ「近世以前の土木・産業遺産」の「都道府県別データ一覧にある防火関連遺構」[6)]を管見する限りでは、現存する火除土手は6箇所と少なく、それぞれの地域での大火を契機として土手が設けられたこと、それぞれの地域で独自に考案された貴重かつ珍しい土木遺産であることが確認できる。大阪市内に火除土手が現存していたことやその火除土手が考案された契機を追究することに意義を感じた。ちなみに江戸では火除土手は現存しないが、明暦3（1657）年の大火を受けて、江戸城の北東と東に長い土手が武家屋敷と町家の間に設けられている[7)]。大阪の川崎東照宮では武家屋敷を接収して火除土手が設けられているので、江戸の火除土手と性質が異なる点も興味深い。

写真1　造幣局の弁財天社　2019年2月25日撮影

本稿では、まず川崎東照宮の火除土手の現状について報告し、火除明地に火除土手が考案された契機について考えてみたい。さらに、火除土手が他に分布していないか探索することにした。全国の禹王遺跡の発見事例[8)]から考えて、実際に災害が発生した場所にそれに関連する信仰施設が建設されている事例がしばしば見受けられたことから、新たに火除・火伏に関する神社・地蔵などの火除信仰施設の調査を追加し、大阪市内に埋没している火除土手をあぶり出す手段を試行してみることにした。その概要も併せて報告したい。図1に地域概観図を、表

* 大阪市立豊仁小学校

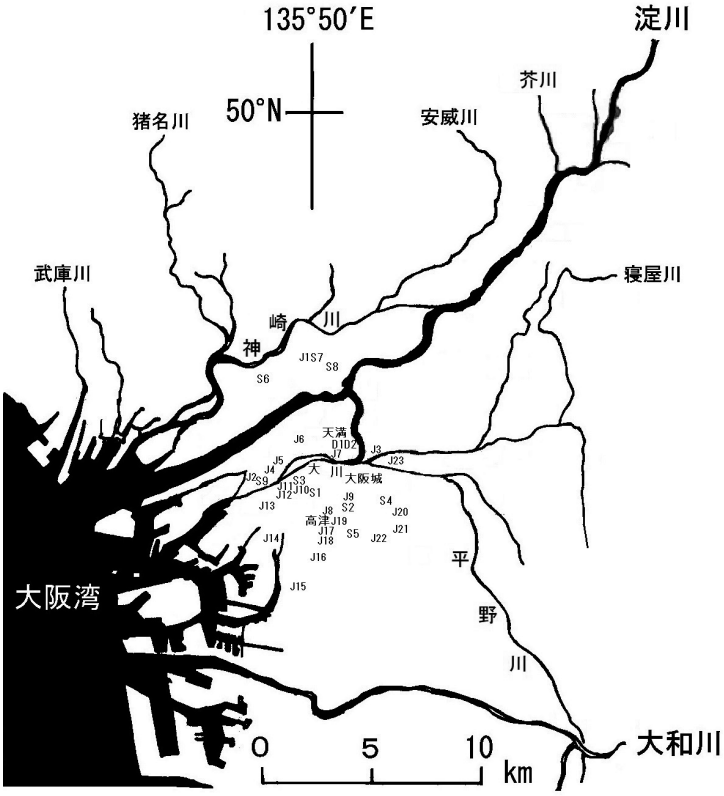

図 1　地域概観図
番号は表 1 の番号に準じる。

1 に火除遺跡の概要を示す。

Ⅱ．火除土手

1．川崎東照宮の火除土手

火除土手は大阪造幣局の厚生施設である桜クラブとその西隣の弁財天社の基礎として、長さ約 70 m にわたって残存している。桜クラブの建物は火除土手頂部を約 40 cm 削平して建設されている（写真 2）。

写真 2　弁財天社裏の火除土手　2019 年 10 月 15 日撮影

築造時期に関しては、大坂の医者らしき人物の日記である「浮世の有様」の「天保十年雑記」「六、尾張家相続の一件」に記録があって、「四月下旬より（中略）北手に於て大鹽平八郎、西田幸右衛門、其外町家迄を取拂と成、其北手には土手を築き、火除地と成て立派成る事共也。」[9] とある。

土手の仕様を示す図書は、管見する限りでは見当たらない。しかし「創業當時の造幣寮全圖　明治 4 年（大阪歴史博物館本館蔵）」という昭和 16（1941）年発行の絵図には東照宮跡の北側に火除土手が描かれていて、土手

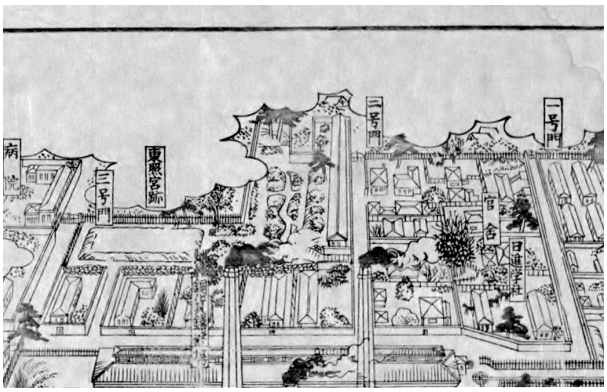

図 2　東照宮跡火除土手付近の絵図
大阪歴史博物館蔵「創業當時の造幣寮全圖　明治 4 年」1941 年（部分）

表 1　火除遺跡概要

	名称または異名	建立時期	建立者	建立の契機など	住所	所在地など
D1	大阪天満宮火除土手	寛政 8 年以前	大阪天満宮	安永 6 年、寛政 4 年の大火による	北区天神橋 1	大阪天満宮
D2	川崎東照宮火除土手	天保 10 年	幕府	天保 8 年の大塩平八郎の乱時の大火による	北区天満橋 1	造幣局桜倶楽部
S1	火除陶器神社	嘉永年間	陶器商人	愛宕山将軍地蔵で、陶器の梱包材（藁）の火除祈願	中央区久太郎町 4	座摩神社
S2	狸坂大明神	昭和 20 年以前	紙商人	紙屋が多く立地していたため、昭和 41 年移設	中央区神崎町 1	南大江公園
S3	荒光稲荷大明神	江戸時代		摂津三田藩蔵屋敷の屋敷神か	西区江戸堀 1	
S4	火除大明神				東成区中道 2	
S5	五条宮・敏達天皇社	7 世紀		四天王寺の鬼門除け、公孫樹を火難除けとした	天王寺区真法院 24	
S6	堀上愛宕大神（神社）	明和元年以降	堀上村	明和元年の堀上村大火の後、愛宕神社を勧請	淀川区三津屋南 1	堀上南一会館横
S7	愛宕社	明治以前			淀川区宮原 1	春日神社之址
S8	愛宕神社	大正 8 年		雷除として勧請	東淀川区淡路 1	
S9	源吉大明神				福島区野田 5	
J1	火除地蔵尊	明治以前			淀川区宮原 1	春日神社之址
J2	火伏地蔵尊	延宝年間以降		安治川の改修によって出土した地蔵	此花区西九条 3	
J3	火除地蔵尊	宝永 4 年以降		新喜多新田の水難忌避のため	都島区片町 2	
J4	北向火除地蔵尊				福島区野田 3	
J5	火除地蔵尊				福島区玉川 3	真如院
J6	黄金火除地蔵	明治 10 年以降			北区太融寺 3	太融寺
J7	火除地蔵尊	大正以前			北区菅原町 10	
J8	明善寺油掛地蔵尊	天平期			中央区南船場 1	
J9	火除地蔵尊				中央区谷町 6	旧印刷所街
J10	（阿波堀）火除地蔵尊	昭和 10 年以前		材木屋が多く立地していたため	西区西本町 1	
J11	火除地蔵尊	天保 3 年以前			西区江戸堀 1	
J12	火除地蔵尊	明治	個人		西区京町堀 3	
J13	火伏せ猫地蔵	平成 21 年			西区本田 3	九島院
J14	北向火除地蔵尊	昭和 20 年以前	隣近所有志		大正区三軒家東 4	碇庵
J15	火除地蔵				西成区千本北 1	西蓮寺
J16	火除地蔵尊				西成区太子 1	浄福寺
J17	火伏地蔵菩薩				浪速区日本橋 3	大乗坊
J18	火除地蔵尊				浪速区日本橋 5	市営日本橋住宅 1 号館
J19	延命火除地蔵				天王寺区下寺町 1	源聖寺
J20	火除地蔵尊				東成区東中本 3	
J21	火除地蔵尊				東成区大今里 4	妙法寺
J22	火伏地蔵尊				生野区桃谷 2	
J23	愛宕地蔵尊				城東区鴫野西 1	

本表に作成にあたっては、田野登『大阪のお地蔵さん』、渓水社、254 頁、1994。田野登「火除地蔵異聞」、歴史手帖 16（5）、7 ～ 16 頁、1988。田野登・桑原尚志「大阪市西区の地蔵目録（一）」、大阪春秋 55、96 ～ 99 頁、1990。田野登「大阪市西区の地蔵目録（二）」、大阪春秋 61、104 ～ 106 頁、1991。田野登「大阪市西区の地蔵目録（三）」、大阪春秋 63、81 ～ 88 頁、1991。田野登「下町地蔵紳士録（二）」、まんだ 40、80 ～ 85 頁、1990。㈶東成区コミュニティ協会『東成区　わが町のまつりフォト』、㈶東成区コミュニティ協会、27 頁、1995。西成区地蔵盆研究会編『西成区お地蔵さん名鑑』西成区地蔵盆研究会、49 頁、2013。インターネットサイト（2019 年 10 月 10 日確認）として、「仏欲観音の町内地蔵尊巡り」、「じぞめぐり」、「地蔵探訪記」、「生野区どこいくの？ここいくの？」を参考にして、現地調査を行った。

は長さ約 100 m であったと推定される。図 2 に東照宮跡付近の絵図を示す。火除土手は東照宮跡の右側（実際の方角は北側）で、そこに土手と築地塀が確認できる。土手の中ほどには樹木（松カ）が一本植えられている。さらに昭和 13（1938）年に天満旧蹟巡り解説を行った藤里好古の説明[10] にも火除土手の記録があって、「切り石で築いた約三尺位の築地が蜿蜒と東に続いてゐます。是は東照宮北限の火除土手であります。此の北側の土地は約五尺程低くなって居ります。（以下略）」とあって、火除土手の北側は土地が約 160 cm 低かったことになる。現在火除土手のある桜クラブ北側は駐車場で、その境界は築地塀でなくコンクリートの擁壁に変わっているが、その落差は約 150 cm（写真 3）であり、概ね一致する。

写真 3　桜クラブ北側　2019 年 10 月 15 日撮影

2. 大阪天満宮の火除土手

大阪天満宮の大門の西、戎門横に堅固な城郭積の石垣が長さ約 6 m 残存する（写真 4）。大阪天満宮の境内で、城郭積の石垣が確認できたのは、この部分のみである。これは小学校の校区探検行事の事前調査で発見した火除土手である。

この石垣の築造時期や仕様は、永井規男氏の大阪天満宮の建築物に関する説明[11] を引用すると「境内西側に

写真 4　大阪天満宮戎門西の火除土手　2019 年 4 月 19 日撮影

折れ曲がり型の石垣があり、（中略）、石垣は寛政八年（一七九六）二月七日付の「口上覚」に見える土手が相当するものと考えられる。この土手は二月七日の時点では出来上がっているが、築造の理由はおそらく安永六年（一七七七）、寛政四年（一七九二）とあいついで襲った大火にこりて延焼を防ぐ防火壁をつくることにあったと推定できる。「摂津名所図会」にも「近年西の方に巍々（ぎぎ）たる封疆（どて）を築て、草木を植、末社を遷すものなり」と記して、その築造が寛政ごろであることを証している（以下略）」とある。

なお「摂津名所図会」[12] の「天満天神宮」の絵図（図 3）で石垣を確認すると、大阪天満宮の西側に長さ約 180 m の石垣があったことが確認できる。また昭和 13（1938）年に天満旧蹟巡り解説を行った藤里好古の説明[13] によれば、大阪天満宮の本社の裏側、霊符社参道筋にあった門は火除土手の穴門、天満穴門と呼ばれていたことが記されている。これは「摂津名所図会」の「天満天神宮」の絵図の霊符社参道筋に天満穴門（図 4）が

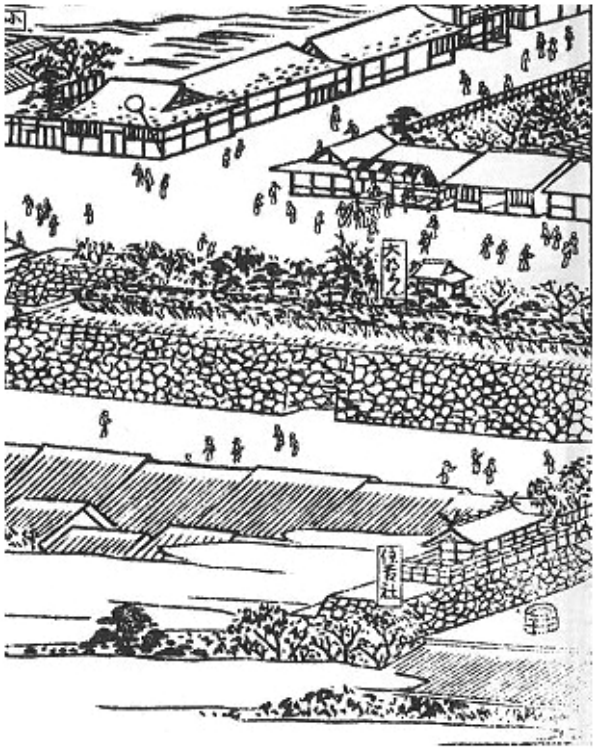

図 4　大阪天満宮天満穴門の絵図
『名所図会叢刊 4』新典社

確認できる。その後大阪天満宮の火除土手は弘化 3（1846）年 11 月に類焼した社殿を示した「天満宮并境内社地惣絵図」[14] では当初の火除土手は戎門西側付近だけとなっていて、なぜか大半の火除土手が消滅している。

3. 火除土手に関するまとめ

火除土手は天満地区で 2 箇所確認できた。大阪天満宮は安永・寛政の大火によって寛政年間に火除土手が普請、川崎東照宮は天保 8（1837）年の大塩平八郎の乱に伴い大火で天保 10（1839）年に火除土手が普請されている。

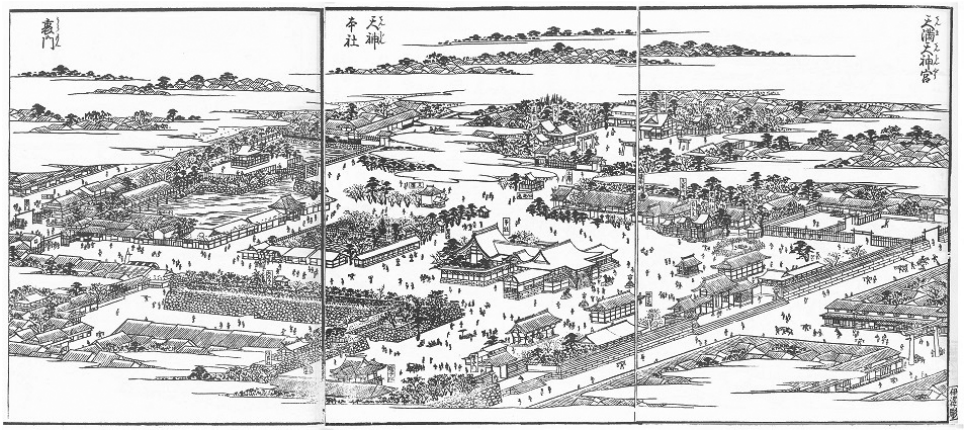

図 3　大阪天満宮の絵図
『名所図会叢刊 4』新典社

おそらく川崎東照宮の火除土手は大阪天満宮の効果を確認して考案したものと考えられる。さらに大阪天満宮の火除土手は弘化3（1846）年11月ごろには戎門西側付近のみと大半が消滅している。なぜか幕末に天満地区の東天満という狭いエリアで火除土手の消滅と新築という現象が起こっている。

Ⅲ．火除信仰施設

1．神社

今回火除に関わる神社を9社（S1～S9）確認したが、火除土手との関連は見出せなった。

近世に建立した神社は、西区久太郎町の火防（ひぶせ）陶器神社（S1）、西区江戸堀の荒光（あらみつ）稲荷大明神（S2）、淀川区三津屋南の堀上愛宕神社（S6）の3社であった。

火防（ひぶせ）陶器神社（S1）は大坂の陶器商人が陶器の梱包材である藁の防火を祈願して、嘉永（1848～1855）年間に勧請された愛宕山将軍地蔵を前身とする神社である[15]。

荒光（あらみつ）稲荷大明神（S2）は摂津三田藩蔵屋敷[16]のあった敷地にある神社で、由来は大名屋敷の屋敷神と考えられる。さらに屋敷神として火除に関わる神を勧請したのは、おそらく摂津三田藩が大名火消[17]であったことと関係があると考えられる。

堀上愛宕神社（S6）は明和元（1763）年12月4日の三津屋村の農家の出火で堀上村が全焼し、村の再建のために勧請されたものである（写真5）。

さらに近世以前に建立された神社は、四天王寺の鬼門除けとして五条宮・敏達天皇社（S5）鎮座している。その境内には樹齢500年の神木があって、五条社務所の説明（写真6）として「神木公孫樹　このいちょうは火難除・延命長寿の守護として信仰をうけ（以下略）」とあって、いちょうの木が火除信仰の対象であることを確認した。

また燃えやすいもの（藁や紙）を扱う商人が祭祀した神社が火防（ひぶせ）陶器神社（S1）と中央区神崎町の狸坂大明神[18]（S2）の2社、狸が祀られている神社が狸坂大明神（S2）と福島区野田の源吉大明神[19]（S9）の2社、他に堀上愛宕神社（S6）、淀川区宮原の愛宕社（S7）、東淀川区淡路の愛宕神社（S8）と淀川右岸で愛宕社を3社確認した。

2．火除・火伏地蔵

今回火除・火伏地蔵を23箇所（J1～J23）確認したが、火除土手との関連は見出せなった。調査にあたっては、まず地蔵調査の嚆矢ともいえる船本茂兵衛による昭和8（1933）年ごろの高津界隈、現在の中央区道頓堀、日本橋、高津、瓦屋町での地蔵調査[20]に関する論文を参考にした。それによれば高津界隈には地蔵が106箇所、うち火除地蔵が15箇所であったこと、当時は地蔵の異名として火除と延命が一番多かったことが記録されている。さらに「大阪のお地蔵さん」の著者の田野登氏の研究成果[21]、インターネットサイトに掲載された地蔵サイトなど[22]から、大阪市では火除・火伏地蔵を45箇所以上確認したが、令和元（2019）年7月から11月にかけて現地確認した結果、23箇所にとどまった。23箇所中

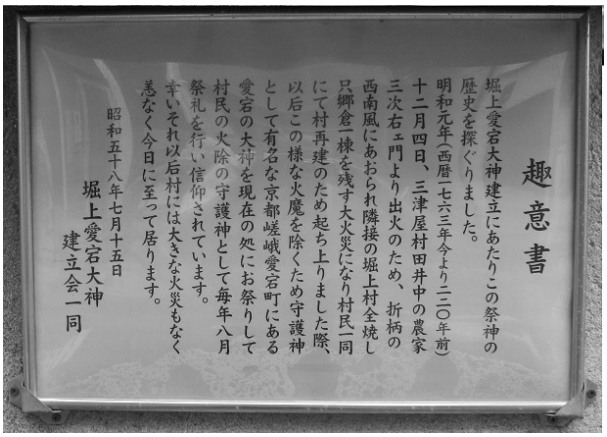

写真5　淀川区三津屋　堀上愛宕大神　趣意書　2019年10月2日撮影

写真6　天王寺区真法院　五条宮・敏達神社　樹木公孫樹説明板　2019年10月7日撮影

10 箇所は寺社安置であった。

火除・火伏地蔵の調査では、江戸時代の火除明地に火除地蔵（天神橋北詰付近、片町）が 2 箇所（J3、J7）確認された。2 箇所の火除地蔵のうちで江戸時代に建立されたことが確認できた地蔵は、都島区片町 2 丁目の寝屋川右岸の火除地蔵尊（J3）のみで、片町地蔵尊保存会の説明板によると、宝永元（1704）年の大和川付替えに伴って、新喜多新田として開発されたために水難忌避と地鎮を願って祀られたと考えられている（写真 7）だけで、大火や火除明地については全く触れられていない。なおⅢ－ 1. 神社の項で、いちょうの木が火除信仰の対象であることを確認した。その観点で見ると、西区江戸堀一丁目の路次奥には、香炉に天保三壬辰十二月新調朋友講の銘のある火除地蔵尊（J11）があって、横に大きないちょうの木がある（写真 8）。これは五条宮・敏達天皇社と同じく、いちょうの木を火除信仰の対象と見做した可能性も考えられる。

写真 8　西区江戸堀　火除地蔵尊といちょう　2019 年 11 月 11 日撮影

3. 火除信仰施設のまとめ

川崎東照宮や大阪天満宮で火除土手が確認されたので、信仰施設と関係が全くないとは言えないが、主に火除を祈願する信仰施設と火除土手の間では関係がなかった。しかし火除明地に建立されている地蔵尊は 2 箇所確認できた。

また火除信仰施設の分布（図 1）を見ると、大川沿いや大阪城の南部に集中する傾向がある。これらの地域は文久 3（1863）年の改正増補国宝大阪全図（積典堂版）と照合すると概ね武家屋敷と町屋の境界部分に当たる部分である。江戸では武家屋敷と町屋の境界に幕府によって火除土手が設けられていた[23]ので、大阪では火除土手の代わりに町人が火除信仰施設を設けた可能性も考えられる。

写真 7　都島区片町　火除地蔵尊　説明板　2019 年 8 月 17 日撮影

淀川右岸では愛宕社を 3 社確認した。そのうち春日神社之址の愛宕社（S8）や火除地蔵尊は建立の契機は不明であったが、堀上愛宕神社（S6）は地域の火事が契機で村の再建のための勧請、愛宕社（S8）は雷除のための勧請と石碑に刻まれていたので、春日神社之址の愛宕社も天災を忌避するために勧請された可能性がある。また火除の信仰対象としては狸、いちょうの木を確認した。

Ⅳ. おわりに

以上、火除土手ならびに火除信仰施設の紹介を行った。

1）火除土手は、川崎東照宮と大阪天満宮で確認できた。大阪天満宮の火除土手が川崎東照宮での火除土手の契機となった可能性が考えられる。またこれらの火除土手はほとんど認知されていないので、貴重な歴史災害遺産として説明板などを追加すべきと考える。

2）火除土手の保存状態については大縮尺の地図などを作成して記載しなかった。今後大阪天満宮における火除土手の新築と部分消滅、かたや川崎東照宮における火除土手の新築について幕末の東天満の地域史の観点で復原していきたい。

3）今回火除土手の分布調査のために仮説として火除信仰施設の分布との関連を見出そうとしたが、新たな火除土手は見出せなかった。但し大阪では火除信仰施設が大川周辺や大阪城南部などの武家屋敷と町屋の境界に立地する傾向があった。これは江戸のように幕府主導で火除土手を設けるのではなくて、町人主導で火除信仰施設を設けて防火祈願した可能性が考えられる。また火除明地に建立された地蔵も2箇所確認されたので、今後は火除明地と火除信仰施設との関連を消滅した火除地蔵尊などの分布も追加して、幕府などの防火政策と町人の火除信仰の関係を深耕してみたい。

付記

本文作成にあたり、大阪市立中央図書館大阪室調査相談担当、大阪府立中之島図書館、造幣局広報室の片岡秀晃氏、近畿民俗学会副会長の伊藤廣之博士、市立枚方宿鍵屋資料館の片山正彦博士には資料調査に協力頂いた。岡山大学の馬場俊介名誉教授には火除土手に関して貴重なご指導を頂きました。記して謝意を申し上げます。

注

1）村田路人「第一節　凶荒と災害　1火災」、新修大阪市史編纂委員会編集『新修大阪市史　第4巻』、大阪市、1990、365～378頁。
2）①大阪市立中央図書館蔵『浪華御役録　亥年頭改』、神崎屋清兵衛、1770。②大阪市立中央図書館市史編集室編集『大阪編年史　第11巻』、大阪市立中央図書館、1971、282～283頁、③新修大阪市史編纂委員会編集『新修大阪市史　史料編　第7巻』、大阪市、2012、321～323頁、452～455頁。
3）木谷幹一「大阪府における明治18年「伊加賀切れ」に関する記念碑」、京都歴史災害研究20、2019、43～51頁。
4）例えば①文久3（1863）年の改正増補国宝大阪全図（積典堂版）、②大塚隆・矢守一彦・山田光二監修『京都・大阪・山陽道』、太陽コレクション　地図　江戸明治現代、平凡社、1977、154頁＋特別付録地図6点。
5）湯川敏夫「大阪にあった東照宮のその後」、大阪府立大学21世紀科学研究機構　大阪検定成果客員研究員　平成29年度研究成果報告書、2017、頁表示なし。
6）2019年1月20日確認。
7）例えば①斎藤庸平・田畑貞寿「火除地等の防火機能に関する実証研究」、造園雑誌55、1992、355～360頁。②小川雄二郎「都市における地震火災の危険性とその軽減策」、住宅総合財団研究年報20、1993、25～33頁。
8）例えば①大脇良夫・植村善博編『治水神　禹王をたずねる旅』、人文書院、2015、216頁、②植村善博・治水神禹王研究会『禹王と治水の地域史』、古今書院、2019、153頁。
9）「浮世の有様　九　天保十年雑記　六、尾州家相續の一件」、原田伴彦・朝倉治彦編『日本庶民生活史料集成　第11巻』、三一書房、541～542頁。
10）藤里好古「（東）天満舊蹟巡り解説」、上方95、1938、52頁。
11）永井規男「大阪天満宮の建築」、大阪天満宮史料室編『大阪天満宮史の研究』、思文閣出版、1991、229～258頁。
12）例えば『名所図会叢刊4』、新典社、1984、25～27頁。
13）藤里好古「（東）天満舊蹟巡り解説」、上方95、1938、47頁。
14）例えば①矢内昭「天満郷の形成と町割の変遷」、大阪天満宮史料室編『大阪天満宮史の研究第二集』思文閣出版、1993、90頁。②近江晴子「大阪天満宮の境内地・社地における旧大名家屋敷について」、大阪天満宮史料室編『大阪天満宮史の研究第二集』思文閣出版、1993、132頁
15）川端直正「靭の歴史」、野村修造、1974、111～113頁。
16）例えば①西区史刊行委員会編「西区史　第2巻」、清文堂出版、1979、303頁。②谷直樹編集『大坂蔵屋敷』、大阪市立住まいのミュージアム、2017、80頁。
17）池上彰彦「江戸火消制度の成立と展開」、西山松之助編『江戸町人の研究 第5巻』、吉川弘文館、1978、98～99頁。
18）街角企画株式会社編集「大阪市中央区わがまちガイドナビvol6　坂の町　難波宮周辺の暮らしと文化」、中央区未来わがまちフォーラム、2011。
19）創立100周年記念事業委員会編集『よしの創立百周年記念』、創立100周年記念事業委員会、2010、78頁。
20）①船本茂兵衛「地蔵祭と地蔵尊の由来」、上方32、1933、54～60頁。②船本茂兵衛「地蔵祭と地蔵尊の由来　續」、上方34、1933、60～65頁。③船本茂兵衛「地蔵祭と地蔵尊の由来　續」、上方36、1933、44～52頁。
21）①田野登『大阪のお地蔵さん』、渓水社、254頁、1994。②田野登「火除地蔵異聞」、歴史手帖16（5）、7～16頁。③田野登・桑原尚志「大阪市西区の地蔵目録（一）」、大阪春秋55、96～99頁、1990。④田野登「大阪市西区の地蔵目録（二）」、大阪春秋61、104～106頁、1991。⑤田野登「大阪市西区の地蔵目録（三）」、大阪春秋63、81～88頁、1991。⑥田野登「下町地蔵紳士録（二）」、まんだ40、80～85頁、1990。
22）文献としては①㈶東成区コミュニティ協会『東成区　わが町のまつりフォト』、㈶東成区コミュニティ協会、27頁、1995。②西成区地蔵盆研究会編『西成区お地蔵さん名鑑』西成区地蔵盆研究会、頁、49頁、2013。インターネットサイト（2019年10月10日確認）では、「仏欲観音の町内地蔵尊巡り」、「じぞめぐり」、「地蔵探訪記」、「生野区どこいくの？ここいくの？」、「空堀お地蔵さんマップ」など。
23）7）に同じ。